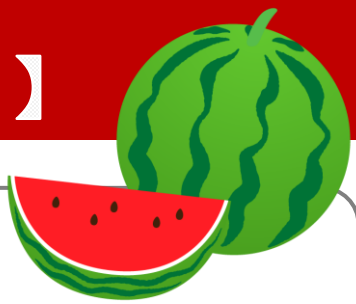
学びを通じて人々の愉快な人生を演出する

月刊 ＶＩＣ通信 【2026年8月】



編集前記

皆さんこんにちは！

夏真っ盛りの８月になりました。

気温が高く暑い日が続きますが、皆さんはどのように過ごしていますか？

エアコンで温度を下げたり、ハンディファンを持ち歩いたり、冷感スプレーや冷却タオルで直接科学的に涼をつくり、暑さ対策をすることが多くなったと思います。

しかし、日本では、暑い季節を受け入れながら、心地よく過ごす昔ながらの工夫もあります。

筆頭は「風鈴」ではないでしょうか？すだれや打ち水、うちわなどは多少なりとも気温を下げたり、体感温度が低くなったりしますが、「風鈴」は、鈴の音を聞き、風になびく短冊（鈴の下に糸で吊るされている長方形の紙）を見て涼しさを感じます。

この「風鈴」は、元々災いを避け、仏様の力で守る「風鐸（ふうたく）」というものでした。「風鐸」は、約2000年前の中国で、邪気を払う魔除けとして、人々に災いを知らせるという宗教的な意味合いが強いものでした。家の軒先に大型の鈴を吊るし、風が吹いて音が鳴ることで、悪いものを遠ざけると考えられていました。

「風鐸」は奈良時代に仏教文化とともに日本へ伝わり、寺院の屋根の四隅に吊るされました。中国同様に、仏様の力で災いから守るという意味を持っていました。この時代では、現在の風鈴とは違い、かなり大きな金属製のものでした。

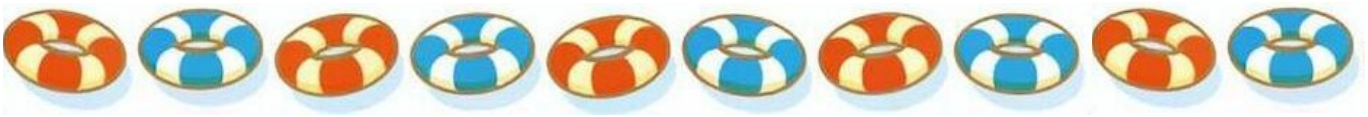
その後、江戸時代にガラス製品の技術が発達し、庶民も風鈴を楽しめるようになりました。江戸では、長屋の軒先や商家の入口、縁側などに吊るされ、音で涼を感じるという日本独特の文化になりました。当時の人々は、五感を使って涼を楽しんでいました。

江戸時代後期になると、あえて口の部分をギザギザに仕上げることで、独特の「チリンチリン」という音を生み出し、内側に絵を描いた手作りのガラス製「江戸風鈴」が人気になりました。

実際には「風鈴」が気温を下げるわけではありませんが、五感を使って涼を楽しむ日本人の生活に今も根付いています。

ＶＩＣ通信も五感で感じていただけるお役立ち情報をお届けいたします。

株式会社バリューイノベーション　代表取締役社長　鈴木正志



クイズ「お言葉ですが」

「根回し」の由来

会議や交渉の前に、あらかじめ関係者に話を通しておくことを「根回し」と言いますが、この言葉が、もとは造園の専門用語だったのをご存知でしょうか。

庭木や、特に松などの大木を移植する際、いきなり土から掘り起こしてしまうと、根が傷んで枯れてしまうことがあります。



そこで植木職人は、移植する一～二年ほど前から、木の周囲を掘り、太い根の一部をあらかじめ切っておくという作業を行います。こうすることで、切った部分から細い「ひげ根」が新たに生えてきて、根が増え、移植後も木がしっかりと養分や水分を吸収できるようになるのです。この移植に備えて根を整えておく作業を、「根回し」と呼んでいたそうです。

いきなり大きく環境を変えるのではなく、事前に少しずつ準備をしておくことで、変化にうまく適応できるようにするという発想が、人間社会にも当てはまるとして、明治以降、「事前に関係者一人ひとりに話をしておき、了承を得ておく」という意味でも使われるようになりました。

今ではすっかりビジネス用語として定着した「根回し」ですが、その語源をたどれば、庭師たちの丁寧な仕事ぶりに行き着きます。

私も、庭師のような、事前準備と丁寧な仕事を心がけたいと思います。

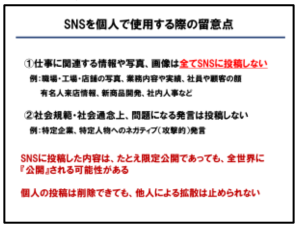
（金子）

けんげんいじょう(研修の現場からのいい情報)

組織人としての対応力を磨く「コンプライアンス研修」

今月は非鉄金属系の企業で全社員を対象に実施した「コンプライアンス研修」をご紹介します。
特に今回の研修では昨今話題によくあがる**「SNSに潜むリスクを知り、コンプライアンス問題を未然に防ぐ」**ことを目的に学習してもらいました。

冒頭で「SNSを使うことで発生するリスクはなにがありますか？」という問いを皆さんに投げかけました。
「会社の重要な情報が漏れてしまう」「個人情報漏洩」「著作権の違反」など様々な意見があがっており、しっかりとリスクについては認識をできているようでした。
次に最近SNSを介した情報漏洩の事例を通じて、なぜSNSでの情報漏洩が多いのかをお伝えしました。
特に「限定公開という油断」が直近で起きている問題には共通しています。
「鍵をかけているアカウント」「友人にしか公開をしていない」「社内のみのSNS」などにより情報が外に漏れないように感じてしまっているということです。



SNSに投稿した内容は、たとえ限定公開であっても、全世界に『公開』される可能性があるということ、個人の投稿は削除できても、他人による拡散は止められないということを、しっかりと認識することが重要です。
そして、情報漏洩によって、企業が大きな損害を受けるだけではなく、漏洩させた個人も「特定されたり」「デジタルタトゥー」として半永久的に残り続けてしまい、人生に大きな影響が出る可能性があることもお伝えしました。

本研修を通じて、世の中で起きているSNSにおけるコンプライアンス問題が他人事ではなく、自分が当事者になってしまう可能性があることの認識を高めていただけたと感じます。（大越）

「けんげんいじょう」のバックナンバーや、研修ご担当者様の声などは、会社ホームページでもご覧いただけます。
http://value-i.jp/

Newへぇ～S



今月は、エジプトにおける「学校教育改革」の記事に注目しました。
エジプトは、現在1億2010万人と日本とほぼ同等の人口を有しており、アフリカ大陸ではナイジェリア、エチオピアに次ぐ3位の大国です。急速な人口拡大が続いたため、学校教育の質の低下が課題となっており、日本の制度を参考にした教育改革が進められています。普段は意識することのない日本の教育の価値を、海外からの視点を通して改めて認識することができましたので、ご紹介いたします。

～～

教育なければ成長なし　元エジプト高等教育相　ハニー・ヒラール氏

（前略）エジプトの教育は旧宗主国の英国の影響は受けていない。クリティカルシンキング（批判的思考力）や社会規範を重視する教育制度が根付いていたためだ。その伝統的な価値観が崩れたのは子どもの数が急激に増えたからだ。(中略)一時は1クラスの生徒数が100人を超えていた。教育の質が下がったことで、学校に通うのをやめる生徒も少なくなかった。
(前略)2016年に日本と教育分野のパートナーシップを結んだ。初等教育から高等教育まで幅広く日本の制度を取り入れている。(中略)力を入れているのは「トッカツ」だ。日本語の特別活動に由来する言葉で、(中略)掃除や学級会を教育の現場に取り込んでいる。エジプトには生徒が自分で教室を掃除するという発想はなかった。トッカツを通じて公共の場を清潔に維持する責任感、協働して物事を進めていく姿勢を身に付けられると考えている。
教育改革の成果が表れるまでにはかなりの時間を要する。行動や規律が当たり前のように定着するには少なくとも15年はかかるだろう。しかし、教育の質の向上や人材育成をおろそかにすれば、経済成長はいつまでも実現しない。

抜粋：日経新聞朝刊（7/16）11版　6面　グローバルオピニオン　「教育なければ成長なし」

～～

「特別活動」とは、学級活動、児童会・生徒会活動、クラブ活動、学校行事の4つを中心に構成される指導領域のことで、私たちもごく自然に経験してきたのではないでしょうか。
ヒラール氏がインタビューの中で、「単純に知識やスキルを身に付けるのが教育だとは思わない。幼少期から教えられ、大人になると気づかなくなるような行動や生活規範こそが経済成長や社会のあり方を大きく左右する。」と述べていたのが印象でした。
日本が教育のお手本であり続けられるよう、改めて学校教育の価値を再認識するとともに、責任感、協働姿勢など注力する必要があると思いました。（秋山）

今月の読書



『教えない教え』

著者：権藤博
発行：2010年11月22日初版

本書は、「権藤、権藤、雨、権藤……」と謳われるほど連投を重ね、二年連続で最多勝投手に輝いた権藤博氏による、育成についての書籍です。権藤氏は、無理な連投により体を壊し、選手時代は長いものではありませんでした。しかし後年、現役時代の自身の苦難の経験を生かし、名コーチとして復活しました。その後、監督就任のその年に横浜ベイスターズを日本一に導き、監督としてもその名を轟かすことになりました。

本書に記されているのは、権藤氏がコーチ時代に何人もの監督と出会い、「自分が監督になったら、これだけはやらないぞ」と感じた“べからず集”をまとめたものだとも言われています。この“べからず集”は、野球だけに留まらず、様々な組織のマネジメントに活かせるものだと感じました。

特に印象的だったのは、コーチに就任した権藤氏が参加した、アメリカの教育リーグでの出来事です。

> 教育リーグと言えば、アメリカのプロ野球の最底辺にあたるリーグである。私はそこで、後のコーチングの礎となる、ある出来事に遭遇した。
> 教育リーグの選手たちには上手い選手もいれば、どうしようもなく下手な選手もいるごった煮状態。（中略）
> コーチは右バッターにライトヒッティングを教えるため、選手に対して、
> 「バッティングゲージの右側のネットに打球を当てなさい。ボールが当たったら私を呼びに来なさい」
> と言い残し、どこかに行ってしまった。（中略）いくら打っても全く右側に打球がとばないその選手は、自分の不甲斐なさに業を煮やし、バッティングゲージの脇でじっとその様子を見ていた私に、
> 「一体どうしたらいいんだ？」
> と聞いてきた。（中略）
> 「スティバック。もっとバックスイングのときにタメをつくりなさい」
> とすぐに助言を与えた。すると数本打つうちに要領を掴んだのか、しばらくしてその選手の打球が右側のネットに当たるようになった。その選手は嬉々として、先ほど指示を受けたコーチのところに飛んで行った。（中略）
> 「ベリー・グッド。で、誰に教えてもらった」
> 「彼です」
> コーチは選手に「OK」と言うと、私のところにやって来た。そして私にこう言った。
> **「Mr.ゴンドウ。教えてくれるのはありがたい。でも教えられて覚えた技術はすぐに忘れてしまうものなんだ。それとは逆に、自分で掴んだコツというのは忘れない。だから私たちコーチは、選手がそのコツを掴むまでじっと見守っていてやらなければいけないんだ。」**

アメリカ人コーチのこの発言を受けて、権藤氏は強く衝撃を受けたと言います。それまでも、「Don’t over teach（教えすぎない）」ということは心がけていたそうですが、この時初めて、その言葉の本当の意味を知ったそうです。

当社の研修でも、“ティーチング”と“コーチング”の違いをお伝えしていますが、近いものがあると感じました。ティーチングとは、指導者が被指導者に答えを示す教え方、コーチングとは、被指導者が自ら答えを出せるように指導者が引き出す教え方です。もちろん、答えを示した方が早いのですが、被指導者が深い気付きを得たり、大きく成長したりするには、コーチングの方が適していると考えられています。

誰もがAIを使うことが当たり前となった今、わからないことがあれば、AIに聞くと大抵どんなことでもすぐに答えを教えてくれます。これにより業務は効率化され、あらゆることのスピードが格段に速くなった昨今ですが、こうして得た知識は、自分の身についていくのでしょうか？これを繰り返していると、人間の成長は止まってしまうのではないかと、不安を感じることもあります。

時にはAIに頼らず、少し立ち止まって、自分で試行錯誤してみることも必要だと思いました。

また、自分が指導する立場になった時には、すぐに答えを示すのではなく、できるまでゆっくりと見守ってあげることも、相手の成長のためには重要だとあらためて感じました。

（金子）

食べてmeal？ 飲んでみ～る？

老舗醤油蔵の秘伝の味「あけがらし」

今月は、山形県長井市にある、寛政元年創業の醤油・味噌醸造所、「山一醤油」さんの『あけがらし』をご紹介します。

『あけがらし』は、米麹や醤油、からし、麻の実などを使用した、無添加の発酵調味料です。江戸時代から当主の一族に代々受け継がれてきた秘伝の味で、現在も山一醤油さんでのみ製造されています。著名人にもファンが多く、テレビやラジオ、雑誌などで取り上げられることもあるため、その名前を耳にしたことがある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

米麹の甘みと醤油のコクに、やさしい辛みが加わった奥深い味わいが特徴です。麻の実のプチプチした食感も楽しめ、熱々ご飯のおともにピッタリです。お酒と一緒に、少しずついただくのもおすすめです。

アボカドにあけがらしをのせ、エクストラバージンオリーブオイルをかけるのも、山一醤油さんのおすすめとのことです。

周囲の人におすすめの食べ方を聞いてみると、

・キンキンに冷やした生のピーマンにトッピング
・宅配ピザにタバスコ代わりに
・きゅうりなど野菜スティックに
・納豆に混ぜて
・あけがらしを塗った豚バラ肉の野菜巻き

などでした。



山一醤油さんの建物も、国の登録有形文化財になっています。
長井市へ行かれる機会があったら、ぜひ訪ねてみてはいかがでしょうか。（夘沢）









仕込み蔵や店舗も、趣があって素敵です。
お味噌やお醤油も、とても美味しいです。

～まとめ～

7月頭に、山形県長井市の田んぼの草取りに参加してきました。ここ数年は、年に2回は長井市を訪れていますが、そのきっかけは2019年の稲刈りでした。

以前住んでいた町で通っていた飲食店で、常連さん達と毎年酒米の田植えや稲刈りに行っていると聞き、「なんだか面白そう」と思って参加したのが始まりです。当時は山形を訪れたこともなく、長井市という地名も知りませんでした。

今回参加した草取りは、田植えや稲刈りに比べて参加人数が少ないこともあって、これまで顔は知っていても名前は分からなかったメンバーとゆっくり話す機会があり、距離が縮まったと感じました。また、今回は里山体験施設も訪れて、新しい方々との出会いがありました。新たなご縁が生まれ、長井市との関わりが益々広がったと感じました。

私自身は楽しみながら参加しているだけで、「地域に関わろう」と意識していたわけではありませんでした。後になって、このつながりはいわゆる「関係人口」と呼ばれるものだったと思い当たりました。関係人口とは、移住するわけではなくても、継続して地域と関わる人のことを指すそうです。

ちょっとした興味から足を運んでみて、その土地の人と出会い、何度も訪れるようになっている、「気付いたらそうだった」という地域が、皆さんにもあるのではないでしょうか。

微力ながら、私も長井市の力になれていたら嬉しいなと思います。（夘沢）

